

特集 地域特産作物

V 藍【産地の取組】

由良川藍復活して33年 同好会が種配布し全国に広める

福知山藍同好会 代表 塩見 敏治

一、はじめに ～藍との出会い～

「青は藍より出でて藍よりも青し」とうたわれた中国の荀子の言葉はあまりにも有名です。この青色の染料の原料藍はタデ科の一年生草本であり、藍染めの天然染料の原料として古くから広く作られてきました。そして藍といえば阿波の徳島が江戸時代から大きな産地として知られています。百科事典などでも藍は阿波・摂津を中心にさかんに栽培されたと紹介されています。又、藍染めは古く奈良時代から行なわれ、働く庶民の間に広まり、労働服や普段着には欠かせないものでした。綿をつくり糸をつむぎ藍を作り糸を染め、機を織って着物をつくる。暮らしの中に藍は生きづいて来ました。ところが化学染料の急速な普及によってだんだん栽培されなくなり姿を消していきました。

私にとって藍との出会いとその研究のはじまりは、今日の農家のくらしとふるさとをよくしたいという願いから出発しました。私の住む京都府福知山市の庵我地区は福知山の市街地の東北にあって京都北部を流れる由良川をはさんだ対岸の地区です。庵我地区の低地帯は度重なる洪水で土もよく肥え桑に適し沿線流域には見事な桑園が広がり京都府下でも大きな養蚕地帯でした。しかし時代の流れの中で養蚕農家は激減・桑園は荒廃化、地区住民のくらしと結びついて深刻な問題となり土地利用をふくめ活路が大きな課題のとりくみの中で始まったのです。「庵我地区は蚕の前は藍作りが盛んだった。」という話を思い出し、もう一度栽培が可能なのではないか。どんな歴史をもっているのか。と次々に問題が出て来る中、「何とか取りくんでみたい!」と一步をふ

み出したのです。

二、由良川藍の歴史

由良川は京都、福井、岐阜3県境の三国岳を源流として京都府の中流域を流れる1級河川です。この京都の中流域の福知山市を中心として中世から近世現代に至って藍の栽培と紺屋が発達しました。藍についての記録は京都松尾大社の所蔵文書、東家文書にのこる福知山市雀部庄のものが初見です。

福知山地方では六百年あまり前に由良川流域で「あいの栽培」があり、五百年あまり前に紺屋の始まりを確認することができ、由良川藍染めはこの時期から始まっていたと言う事がいえます。由良川流域での藍と紺屋の発達は、1600年に福知山城の築城と城下町の形成の中で生まれた紺屋町の誕生に象徴され現在も町の名が残っています。

由良川流域では大木の桑が繁茂しその木の下で藍が栽培され、洪水のもとでも藍は収穫することが出来て村が救われた等の記録もあります。明治のはじめの京都の藍の生産は府南部の淀川桂川流域が主流を占めていましたが、明治35年には面積(165.7反)収穫量(35,832貫)と天田郡が京都府で第1位となり、京都の藍の栽培の主産地は加佐



1400年代、福知山で藍が栽培されていたことを示す古文書

地域を含め由良川流域へと変わりました。この時由良川流域の中心であった庵我村は五千貫を収穫。しかしこの庵我村も大正十四年、作付面積百反、収穫量二千四百貫と最後の報告となるのです。明治前期に栄えた葉藍も人造藍、鉍物染料に押されて激減し、1925年（大正14年）京都の藍は庵我村が最後となったのです。しかし、「由良川藍」は京都の最後の産地となった庵我村から昭和57年（1982年）地元老人会を中心に再び藍の種まき復活の産声をあげ今日をむかえる事となりました。（庵我村は現在の福知山市庵我地区）

由良川藍を復活させ種をまいて収穫をした喜びもつかの間「藍は収穫だけでよいのか」と問われ、「染めてこそ藍」と言う出口が待っており、その出口に向かって苦闘の年月が過ぎました。復活から十三年目の夏、1995年我家の物置の片隅でようやく「藍染めに成功！」出口に立つ事が出来たのです。しかし次には「藍色に染まればよいのか！」と新たな課題につきあたりました。ようやく出口に立ったが次への扉を開かなければ由良川藍の復活ではない。毎年種から蒔いて育て、「すくもを作る」「藍を建てる」そして「染める」の工程を実践し活動の失敗と成功を教訓にして前進の道を積みあげ、一方藍染めの「技法の習得と研究」日本の伝統の絞りから現代絞り、型染め、筒描きなど奥の深く広い技法、趣味の領域から工芸へと由良川藍染めの更なる前進めざし今日迄歩んで来まし

た。

三、福知山藍同好会の発足と主な活動

（1）1995年春三月、復活から十三年目の種をまき五月藍の夢実現にむけて福知山藍同好会を呼びかけて十六人で発足しました。七月に初藍が建ち藍染めに成功しました。八月「福知山市人材の森育成事業」で奨励賞を受ける。十一月には第一回由良川藍染作品発表会を開きました。会員を結ぶ絆として同好会発足と同時に毎月一日には「藍ニュース」の発行を決め今日迄続けています。（2015年8月1日 NO254）

（2）藍同好会の活動の原点は「種から蒔いて染めまで」を基本に会員みんなが自分の畑で「藍を育て刈り取りすくもをつくり藍建てをして染める」この活動と春になると「藍の種」の無料配布の二つの活動で「由良川藍」を全国にそして藍を愛するすべての人々に「藍の輪」を広げて来ました。2002年5月からは「藍染めは誰でも出来る」市民講座を開催。第1回は静岡、広島などから21人が参加。回を重ねる毎に近畿二府四県は勿論栃木、茨城、東京、九州等々今日迄第10回の開催講座に約350名をこす受講者を迎えて来ました。「種の無料配布」の活動も発足翌年春から毎年取り組み9年目の2003年には四十都道府県に広がり現在では北は北海道から沖縄まで全国47都道府県4000人余りの人々に送って来ました。アメリカへも2年続



1982年 60年ぶりに種を蒔く



福知山藍同好会のメンバー



〔種から蒔いて育てすくもを作り藍染めまで〕



① 種まき（3月）



② 発芽（20日後位）



③ 定植（5月）



④ 成育（6～7月）

きで送り、藍の生育状況と美しく染め上った写真での報告もありました。

（3）活動の成果を一人でも多くの府市民のみなさんは勿論の事全国の皆さんに観て頂き交流しようと発足一年目から暮らしの中に藍を！と毎年開いて来た「由良川藍染作品発表会」の開催と、発足四年目の1998年夏に開いた第1回「由良川藍まつり」の二つの大きな行事は私たちの活動の発表の場として開催して来ました。NHK はじめ関西テレビや情報誌、諸新聞など報道機関のご協力のおかげで、これ又、近畿、中国、中部方面は勿論遠くは九州、東北、関東からと多い時には1000人をこすお客様を迎え成功を重ねて来ました。また、地元庵我小学校、保育園、幼稚園はじめ地元や近隣女性グループ公民館活動で、本藍染体験会、生葉染め、タタキ染、煮染めなどの体験会の開催で幅広く藍の普及につとめて来ました。2006年第9回藍まつりではタタキ染めをとりいれ障害のある人にも出来ると更に幅を広げました。

（4）藍染めの技法の研究、講習、講座は、素人の集まりでスタートした私たちの重要課題であり、伝統の絞り技法はじめ型染め、筒描き、板締め、型彫りから糊づくり等その研究と諸先生方を招いての講座の開催を日常的に重ね学んで来ました。また、全国の藍のグループとの交流、研修旅行、中国、韓国、ベトナムなど海外研修旅行など視野



⑤ 一番刈り（7月末～8月上旬）



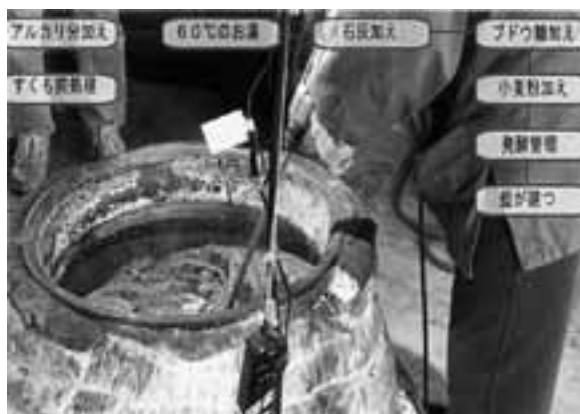
⑥ 藍葉を干す



⑦ 乾燥葉の収穫



⑧ すくもつくり



⑨ 藍を建てる



⑩ 藍の花（10～11月）

を広め、藍と藍染めの奥の深さを学んで来ました。

これら努力の成果として2001年の福知山市展（工芸の部）には会員四人が入賞、代表の塩見敏治が市展賞を受賞しました。以後、毎年入賞、入選者を出して来ました。また、徳島国民文化祭はじめ京都国民文化祭にも出展、入選、入賞者を出して来ました。これらの取組は趣味の域から工芸作品として認められる所まで前進して来ました。

（5）由良川藍染作品が、府市など行政からも認められる様になり、1999年には福知山観光協会の推奨土産品に決まり、2003年には「藍染のれんの町」を呼びかけ観光協会の土産物品にもなりました。また、2013年には「藍のれん」を活用した販売のあるまちづくり活動を支援する「福知山市藍のれんプロジェクト事業補助金」制度が出来、観光旅館組合はじめ商店街に128枚の藍のれんが掛かるようになって来ました。

（6）藍にかかわって藍茶の研究、藍カメ、型紙の発掘と復元講座などの中からは丹波木綿の「地白型」の発見、等々、私たちの活動と研究は垣根を

つくらず、種まきから染までを
四半世紀を越えて現在に至って
います。

以上の様に由良川藍との出逢
いとその歴史三十三年目を迎え
る由良川藍の復活、藍同好会の
発足と二十年の同好会の活動の
主な取り組みをのべて来ました。

私たち同好会活動の原点であ
る“種からまいて染めまで”の
この活動を通じて歴史のある藍
の文化を21世紀に花ひらかせ藍
の輪が更に広がる事を願って
「由良川藍の種」の無料配布を
続けて行きたいと思っています。



記録 DVD 作成の紹介記事
(2011年11月 京都新聞)